第 17 回日中交流会議に参加して『思うこと…』

鹿児島県日中友好協会理事長　　鎌田　敬

今回の訪中は中国政府の招聘で実現したもので、11月7日に開催される第17回日中交流会議に参加することが目的である。
九州から37名、全国から100有余名の参加があり、鹿児島からは私を含めて4名の参加であった。
訪問地は北京と南京である。
久しぶりに訪れた北京は、かって見られた道路を埋め尽くしていたアウディの黒のセダンが姿を消し、日本車が増えているのに驚いた。街中もゴミがなく清々しい。
観光地の古い街並みでは、漢時代のきれいな服装をして記念撮影をしている女性を多く見た。街には近代的なビルが増えているが、そこに住んでいる人たちの意識がかなり変わってきている気がする。
　会議開催日の前日の11月6日は、午前中より中国外交部を表敬訪問した。
外交部の1室に通されて表れたのは、参事官の鄧偉さんであった。
鄧偉さんは2014年から2015年まで長崎総領事をされていた方で、当時、九州の行政書士会の会長をしていた私は、各県と総領事館の交流を図っていたので、その縁で長崎会と総領事館との交流でお会いした。
その時以来の再開である。
早速、ランタンフェスティバルの時に、長崎総領事館で交流の晩餐会を開いて頂いたお礼を述べた。
鄧偉さんも長崎のランタンフェスティバルを懐かしがっておられた。
まさか今回、北京で鄧偉さんにお会い出来るとは思っていなかった。
長崎は長崎県日中親善協議会という、私達の日中友好協会とは別の組織で活動しているが、相互に交流がない。その旨を伝えると、鄧偉さんは「せっかく九州に2つの総領事館があるのですから、貴殿の協会と長崎の協議会との交流をされては如何ですか。」と言われた。
　私も先進的な友好活動を行っている長崎との交流を望むものである。

その日の夕刻に長富宮飯店にて歓迎会があった。「第17次中日交流会議歓迎晩宴」である。
中国人民対外友好協会会長の楊万明氏の歓迎の挨拶に続いて、中日友好協会常任副会長の程永華氏が挨拶をされた。
日本からは、日中友好協会の岡崎温氏、在中国日本大使の小泉勉氏が挨拶をされた。
　実は程永華氏と私は古い友人同士なのである。
日中国交回復後、初の国費留学生6名として氏は創価大学に入学して来られた。
その中には大使になられた程永華氏を始め、のちに長崎総領事をされた藤安軍さん、札幌総領事をされた許金平さんが居られた。
私が創価大学2年の時である。
セレモニー終了後に、私たちはお話しをした。氏が語った「私が留学中には、日本政府は何もしてくれませんでした。その時に私の学生生活を支えて下さって有難うございました。私の学業を支えて下さって有難うございました。このことを4年前に伝えたかったのですが、コロナで今になってしまいました。」と創立者池田先生を偲んで言われた。
私はこの言葉を創立者にお伝えしたかったのであるが、帰国後5日目に創立者はお亡くなりになった。

お手紙を出すことも出来なかった。かえすがえすも残念である。
　翌日の「第17次中日交流会議」は日中双方から250名の参加者で会議が行われた。
　そもそもこの交流会議は日中平和友好条約締結の当時に、宇都宮徳馬会長と廖承志氏との間で発案され実行されてきたもので、日中の会議を2年おきに、日本と中国の相互の国で、交代で開催する取り決めをして始めたものである。
コロナ禍で開催が延期され今回が17回目で中国での開催となった。
会議は4つの分科会に分かれて、それぞれ発表と意見交換が行われた。
会議では日中双方からそれぞれ5．6名の発表者が日中友好の活動について報告を行った。
私も第4組で発表した。その発表の内容については原稿を提出させて頂くので、興味のある方は読んで頂きたい。
中国側の発表の中で、中国の少子高齢化を取り上げ、今後日本の介護事情の取り扱いを参考にしていきたいという発表があり、少子高齢化問題で世界の最先端にある日本の事情を考えさせられた。
会議を終えると話しかけてくる中国の方が居て、聞くと鹿児島市役所の中国の職員の友人の方で、私が来ることをメールで知っていたという。世界は狭くなったと思った。

その日の夜は程永華氏の招待で、九州のメンバーは北京のレストランで歓待を受けた。
程永華氏も参加された。程氏はひっきりなしに写真撮影を求められ、食事を取る暇もないほどであった。
私も同行の鹿児島国際大学の学生2名と一緒に写真を撮った。
程氏と久しぶりに学生時代の話も出来た。食事は北京ダックが2回も振舞われるという豪華なものであった。このひとときは、おそらくこれから何回も思い出すであろう、豪華で楽しい貴重な思い出となった。
（写真の中央は程永華氏。左　鎌田　右康上先生）

翌日は高速鉄道、中国の新幹線で北京から南京まで移動した。
時速 350kmで疾走する列車で、4時間ほどで南京南駅に到着した。
寒い北京から一転して鹿児島のように暖かい南京へ到着した。
南京はプラタナスの街路樹が亭々と生茂る古都である。
南京で特筆すべきは南京虐殺記念館の訪問である。最初に献花所で献花と祈りを行った。それから記念館に入館した。
記念館に来たのは2回目であるが、以前より大きく設備も充実してきており、来館者も増えている。
私は持参した数珠で発掘された遺骨の前と、万人坑の遺骨の前とで慰霊のご祈念をさせて頂いた。
来るたびに思うのは、日本人の好戦的な民族性である。
日本の明治以降は外国との戦争の歴史である。平成以降に戦争はないが、これがいつまで続くという保証はない。
我々は戦争を起こさないという不断の努力を続けなければならない、と改めて思った。
それから南京師範大学を訪問した。

東洋一の美しい大学と称されるキャンパスは、緑に満ちていた。南京師範大学は学部生が3万人、大学院生が1万人合計4万人の総合大学である。大学院生と話をした。出来れば同行した学生達と師範大学の学生との交流をして欲しかったが、今回実現出来なかったのは残念である。
中国の学生は大学院を卒業しないと一流の会社に就職できないと言い、大学院を目指す。
鹿児島に来ている留学生も殆どが大学院性である。ところが日本の学生は大学院に行こうとしない。
その差が将来どのような形で現れるかを考えると不安になる。
日本のマスコミの報道に反して、中国は着実に進化し発展している。
これは教育に力を入れているからだと思う。大学等の教育機関の充実もそうだが、今回行われた会議にしても通訳に若い人を登用し、参加者にベテランの通訳を配し、通訳の間違いにその場で指摘して実践的に教えているのを見ると、若い人の育成に力を入れているのが窺い知れる。
今後の交流は若い人の交流に成果があるのではないかと思う。
以上が私の訪中記であるが、私が心に留まったことを中心に書き綴ったので偏りがある。

海を見ると目に入るのは波の高さや風の強さで潮の流れは見えない、巷間流布されている中国への批評は波の高さや風の強さであるが、中国の潮の流れは悠久として、進化を繰り返して広く流れている気がする。ともあれ今回、訪中の機会を与えてくれた中国政府に感謝したい。